

「両方でおんなじ事をしてるのかもしれない」

さういつて私は歸ることにした。そして袴をつけ、別盃をあげるつもりでさげてきた飲み残りの葡萄酒の瓶をおいて「お宿」をでた。——追記。この頃にはもうそれほど酒が手に入りにくくなつてたとみえる。——驛ぢかくで思ひがけず奥さんが追ひついた、おみやげの野菜の包みをもつて。あとで急に思ひついたのだらう。ちやうど電車がついたところで降りた人たちがきたけれど鹽田氏はゐなかつた。私は奥さんと踏切をこえながら

「とにかくもう一臺まつてみませう」

と寒驛の人げのない改札口の柵に並んで身をよせた。さうして先ほどからいひそびれてた話を思ひきつてきりだした。

「私なり家内なりどちらか生きてゐればいいけれど二人とも爆死するかもしれない。だから……」

と私は問題を急に具體的に解決してしまはうとした。……次の電車がついても鹽田氏の姿はみえなかつた。で、あきらめて奥さんの手から野菜の包みをうけとり、改札口をはひつて向う側のホームにあがつた。奥さんは歸らずに立つてゐる。やや暫くして電車がきた。私は乗るときに帽子をとり、中から窓ごしにまた挨拶した。いふことをいつてしまつて氣がらくになつた。ゆうべふと「爆死」といふところへ氣がついたのだ。

ひるぢかくに家へついた。鹽田氏も私が「お宿」をでた時刻に私のところを出たらしい。舌打ちをした氣もちで洗面所で汗をふいてるとき電話。

「これからすぐ伺ひます」

といふ。晝飯をたべずにとつて返してくるのでこちらもたべずに待つところへおいてきた葡萄酒とビール二本、重箱におはぎをもつてきた。和子と三人茶の間の食卓で杯をあげる。鹽田氏はきのふ實は遠慮して刀はいらないといつたものの歸る途中折角の御好意をと思ひかへし澁谷から引返さうかとまでしなからそのまま家へ歸つたら家の者にも折角だからといはれまた頂くことにしてけさ先生がお留守にならないうちにと早くあがつたのだ。といふ。両方で同じやうに氣を配り、同じやうな事をして反つてとんちんかんになつた。私は和子に大小をもつてこさせて大のほうを鹽田氏にわたす。家に傳はつたもので、善し悪しはともかくこの節古刀は珍しくなつたのではないかと思ふ。それほど古刀が、人びとが戰場へ出ていつたのだ。鹽田氏は留守へきて、自分が女なら何遍通つても先生のところへ嫁にくる。といつて和子の結婚を祝福したさうだ。どうかと思ふが仲人口ではなし、本氣らしい。また和子の父の激励の手紙、それは出征ときいて死の病床に横になつたまま鉛筆でかいて和子に托した手紙をひどく喜んで、そこにこめられた父の心もちを腹に入れ、刀を私の代理と思ひしつかり身につけて出征する。といふ。元來父と鹽田氏とは縁もゆかりもないのが偶々私の兄の葬式の前後に顔を合せて忽ち意氣投合した。父は和子から鹽

田氏の人物経歴をきき感心して是非一度「雀のお宿」へ行つてみたいといひ、鹽田氏の快諾も得たけれど終に果さずに亡くなつてしまつた。鹽田氏の話によると手紙には、片腕をなくしてもどうかいふ言葉があつたとのこと。父は昔日露戦争の二龍山の死戦にたつた二人生き残つたうちの一人で、その手紙は終に絶筆となつた。

鹽田氏が仙臺へ入隊して間もないある日庄司氏から電話がかつた。庄司さんと取次がれた私は電話口へでて、庄司辰雄さんですか、とわざわざ名まへまでいつて念を押したくらゐ思ひがけなかつた。去年大陸の戦地から歸つたばかりだのにまた歸つてきた。きけば公用とか。庄司さんはもと同じ隊にゐて今は××の病院に勤めてるといふ友人をつれてきた。病院勤めのせゐもあるか色が白くでつぶりふとつた人だつた。座敷へ案内してなによりもまづ無事を祝ひ、ついで和子を紹介する。戦場から戻つて、そしてぢきにまた出てゆく人を迎へる氣もちはまた格別である。さし迫る死別の深刻な危惧の壇上に偶ま幸運に暫くその死の把握を免れてきた人を見る心からの歡喜が奇妙に踊つてゐる。喜びのあまり私は聲高に話す。庄司氏はあちらで手に入れたコニヤクを、お友達は支那料理にでる泥で包んでどうかした家鴨の卵をもつてきてくれた。今や内地は戦亂の大陸から海をこえてはるばるかういふおみやげをもらはねばならぬ缺乏の段階に達したのである。私は生死の巷からきた人の心入れの贈物を嬉しく有り難くうけた。さうして瓶を左り手にとりあげながら

「これ飲みますか」

ときけば

「ええ」

とお客さん同士顔見合せてニヤリとする。豫定だつたとみえる。で、和子にコップと有合せの肴をださせて飲みはじめた。とてもうまかつた。庄司氏は出征して四、五年にもなるだらうか。鹽田氏のお仲間のうちでいちばん温厚、憂鬱だつたのが驚くばかり明朗、濶達になつた。うつかりするとだんびらでみね打でもくひさうだ。半瓶ばかりあげたとき夕食の用意ができたので茶の間へ移つて食事をすませ、和子も一緒にひとしきり歡談して別れた。八月五日にたつとか。

たつまへにもう一度はくるだらうと期待してたら月末頃ひとりできた。汗ぐつしよりなので上著をぬいでもらふ。私はちやうど朝湯からあがつたところだ。

「風呂はどうです、ゆつくりできるなら」

まあいいやうな返事だつたが暫くしてやつぱりはひりたといふ意味のことをぼつんといつた。遠慮だつたらしい。入浴後ゆかたにきかへてもらひ、和子が、どのくらゐゆつくりなされるのか、その都合で汗のものをすすぐから、といへば

「二時間ぐらゐ」

とのことで、上著はとても乾かないから、と衣紋竹にかけ、肌著だけをすすいで干す。茶の間で

話す。幸ひ近來にనికిり壽司もいろいろできた。こないだの飲み残りのコニヤクをあけて仙臺の鹽田氏の元氣な様子などきいてるところへ□□さんがきた。嬌然とはひつてきてしづかに食卓の横に坐る。くれなるの盆大の花が蜜を含んでゆつかりと開いた趣だ。ふくいくと薫る。で、特に關係をいつて紹介し、新にコップをわたして一緒に話す。……お蔭で遠慮がとれて話がはずんだのはもつめの合せだった。數年間の討伐で山東省は殆んど全部まはつたといふことや、敵前二百メートルで彈丸雨飛のうちに馬を堆土の蔭に乗入れようとしても暴れてどうにもならず、あとで調べたら小銃彈が腹をかすつてたなどの武勇談も出た。醫科大學でもう十年ぐらゐも研究したいといふ庄司氏の話から□□博士の或種の片輪の研究のことに成り、私が題材として十數年も興味をもちつづけてることをいつて、しかしあゝいふ研究はいはゆる實益がないし、實例も稀だらうからあまり研究されてゐまいといへば、精神病科のはうなどでは興味をもたれ、研究もされてる。との答へ。これは意外だった。庄司氏は精神病専攻だ。さうかうするうちにはじめの「二時間ぐらゐ」はいつかけし飛んで、次には「本郷へ醫書を買ひにゆく」もうやむやに夕食の時刻になつた。うどんをたべる。

「庄司さんとは不思議な御縁なんだよ」

さういつて私は和子にその譯を話してきかせた。

もう六、七年にもなるだらうか、ある日見ず知らずの人から電話がかかつた。山鳩みたいな聲

で

「□□大學の學生ですが僕たち先生をお訪ねしたいと思ふんですがよござんすか」

と學生らしい届托のない調子でいつた。私はまだ充分健康を恢復してゐない時だったし、いつもなら斷つたにちがひないのをどうした蟲のゐどころかひよいと承諾した。後になつてきいたところによるとお仲間の誰かが古本屋かなにかで「街路樹」を買つて見たのがはじまりで、これは變つたことを書く人だ。といふことになり、訪問といふ段取りにまで進んだ。ところが鹽田氏は急に召集されて來られず、訪ねるなら學生服のうちが氣樂でいいぞ。といひおいて入隊した。で、その後の「學生服」の訪問だったのである。

「よつほど御縁があつたんだね」

と私は和子を顧みて笑ふ。最初のとときだったか庄司氏はいよいよ歸らうといふ立ち際にそれまで出しそびれてたらしくもぐもぐいひながら懷から放哉の好日集かなにかをもつそりとだしておいていつた。自分が好きなのだらうし、私も氣に入ると思つたのだらう。放哉は一高の同期生とは知らなかつたらしい。その山鳩の大學生の庄司氏がきはきはきとものをいふ軍醫中尉の庄司氏になり、放哉がコニヤクにかはつた。顔を見たのはそれが最後に庄司氏は三度めの戰場へ戻つていつた。

さてさうしてけふの七月四日である。朝顔を洗つてるときにベルがなつた。早朝から誰かしら、

何事かしら　と多少の不安を感じて家政婦さんが取次にでたにもかかはらず玄關わきの窓から見たら軍服の鹽田氏が格子のまへに立つてあけるのを待つてゐる。私が洗面所へとつて返し大急ぎで顔を洗つて寢巻のまま玄關へでたときには和子がそこにゐた。

「やあ御氣嫌よう。どうしたんです」

「いよいよ明日南方へゆくことになりました」

と鹽田氏は軍隊式にてきぱきと答へた。モンペ姿は見なれてゐるが軍服ははじめてだ。古つはものだけに身につけて新兵臭くない。茶の間で和子が應對してゐるうち私は湯殿で體をふき、著物にきかへて

「どうも失禮しました」

と改めて挨拶をする。ボルネオの守備、司令部附。つい先頃出征した某氏からはきのふスマトラから便りがあつた。そのほかジャワ、フィリッピン、ソロモン方面と、若い人たちは皆南方にちらばり、庄司氏だけが北支で、これまでのところいちはん戦つてゐる。鹽田氏は

「先生の出られないうちと思つて早くきました」

といふ。朝飯前だといふので一緒に食卓について話しながらたべる。どのくらの時間がある　ときいたら　ゆうべ歸つたのでまだ子供にもあつてゐないし——寐てたのだらう。——友達へ電報をかけたからみんなくるだらうから九時頃には家へ歸らなければ　とのこと。八時にこちらをで

るとすると一時間あまりしかない。幸ひ二、三日前××氏からもらつた葡萄酒の飲み残りで和子と三人杯をあげる。朝だし、よくまはつて元氣よく聲高に話す。和子は黙つて花屋へゆき、菖蒲を座敷にいった。鹽田氏は縁側を通るときすぐそれに氣がつき床のまへに坐つてたいそう感激した。鹽田氏はかねがね「沼のほとり」の愛讀者だつたが近頃はまた「しづかな流」を愛讀してゐるといつた。タゴの話が好きらしい。和子の父の死は庄司氏からきいて知つてゐた。なにやかや八時半まで話して歸つた。歸るとき式臺に腰かけて脚絆きゃはんをつけるあひだ私は土間へおり格子を左右へ一杯にあけて待つてゐる。この一杯に開放する式を鹽田氏はいつも喜んだ。別に心あつてではない。客を迎へまた見送る場合さうしたはうがかりとして自分にも氣もちがいい。脚絆をつけをはつた鹽田氏は立ち上つて重さうな劍をつり、さて不動の姿勢をとつて別れの挨拶をした。こちらもつりこまれて軍隊式に腰を屈める。そして門まで見送つてもう一度挨拶したが、姿が塀の角に隠れると私は門をでた。急行時間で電車が家のまへでとまらず次の區役所前の停留所まで走る。私たちは往來で三度めの挨拶をし、鹽田氏は歩きだした。肩は張つてゐながら劍が長すぎるくらゐ背の高くない後ろ姿が街路樹の蔭を遠ざかつてゆく。學校は休暇中だし、朝の人車の往來はごく少い。そのうちいくらか曲つてゐる並木の線に姿が隠れたので車道へでて見送る。次の停留所の安全地帯へあがつたとき鹽田氏ははじめてこちらを見た。ちやうど電車がついた。舉手の禮をした。こちらは右手を高くあげた。むかうも手をあげて電車にのつた。

「蜜蜂」は出征の途中讀むやうにいつてゐた。「蜜蜂」は北支と、ボルネオと、スマトラと、ジャワへ飛んでいった。蜜をあつめることを忘れる熱帯の蜂にならぬやうに！

結婚

姉の死と同時に私のところの家庭はもう久しく豫期された行きづまりに到着した。残されたのは頭が悪くてものいへない七十をこした兄と六十に手のとどく私、どうにもならない。病中は私が主婦の代役をし、お見舞にきて下さる親戚やお知合ひの婦人の好意に頼つて凌いできたもの。それは餘儀ない窮餘の窮策で、いつまでも續くものでなく、續けるべきものでもない。で、私は考へてたことを實行することにした。結婚。私は誰彼に候補者の物色をお願いした。ある人は祝福してくれた。ある人は悲愴な顔をした。また他の人は意外なことが降つて湧いたやうに仰天した。何でもないものを。結婚しないのも私の思慮なら結婚するのも私の思慮である。場合に應じて適當な生活法をとるだけのことだ、永い獨身生活から結婚生活への轉換はなにか際立つた感じを與へるだらうけれども。皆にお願いした私の言葉はいろいろだつたらうが結局條件は、健康で、善良で、地味で、兄の世話をよくしてくれる人で、少しは話のわかる人といふのだつた。事情が許さないから出来るだけ早く。

なにかとひとの御厄介になつて後始末に日を送るうちに姪の文枝さんと芳ちやん兄弟が相談して話を一つもつてきた。文枝さんの女學校一年以來の親友でお茶の水の専攻科を出てから三年東大の美術史を聴講した人、ある書道の大家の子飼ひの愛弟子で二十年もそのはうの教師をしてるが初婚だといふ。書道は苦手だけれどひとが上手なのは都合がいい。本人、家庭の事情、その他よくわかつてるし、兎も角一度逢つてみようといふことになつた。併しこちらは落第しても平氣だが先方は婦人のことだからといふので一日文枝さんがそれとなく誘ひ出し口實を設けてつれてきた。間さんの奥様がおいでになりました。といふ取次ぎに玄關へ出たら背の高い知らない人をつれてゐる。この人だな。と思つて文枝さんがとり繕ふやうに紹介するあひだにひとわたり見る。永年の教壇生活に疲れ往復の街の塵に汚れたといふ様子をして、粗末ななりをし、粗末なハンドバッグをさげてゐる。後できけば、ちよいと町へ買ひ物にゆかない？ かなにかで郊外の家からつれ出されたらしい。黄痘を病んだあげく永らくお父様の病氣の看護をした疲れが回復してゐなかつたのださうだ。私もまた久しい姉の看護とそれに續く不幸のために心身共に疲れはててゐる。雙方化けさうに年をとつたうへに見る影もなくなつたところを見合つてまあ我慢しようといふことになつたのだからまづ大丈夫だらう。さあどうぞ。と座敷へ案内して石摺りの手本なぞ出し話し始めたところへ來客でその日はそれだけになつた。私のはうは、貰つてもいい。といふことで文枝さんはお友達にうち明け「琅玕」と「沼のほとり」を貸して氣心の知れるまで暫くつきあつ

てみるやうにすすめ、もう一度つれてきておいていつた。お友達は巧く計略にかかつた自分を思ひ出してをかしさうに笑つた。はにかむ年ではなし、話題は藝術的方面にあるし、何かと話したのち私は先方のためゆつくり考へてから諾否をきめるやうにいつて別れた。その後文枝さんからお友達が私に逢ひ私の著書を読んで、もうのばす必要はないから早く話を進めたい。といつてるときいたのでその次に逢つた時に

「そんなに早まつてもし私が狸の化けたのだつたらどうしますか」といつたら

「狸の化けたのでもいい」

といつて笑つた。化けたはうでたじたとする。そこでお父様にどう切り出さうかが文枝さんの次の苦勞になつた。子供のじぶんから往來して至極心安いとはいへ軍人あがりの頑固なところもあり、それに日本流からいへば事の運び方が逆なのだ。といふ譯は、お父様といふのが子煩悩のせもあるかとても石橋を叩いて渡るはうでこれまでいくら縁談をもつていつても纏まつたためしがない。で、今度はひとつ本人同士の間をあらましましきめてからぶつかつてみようといふ相談だつたのだ。とかくして話は切り出された。が、案のごとく石橋主義だ。ところが私がある理由から永年一般に親類づきあひをしないため文枝さんは私についてお父様を満足させるほどの説明をすることができない。そこへこちらは「出来るだけ早く」だ。ああかうの末が一場の悲喜劇とな

つて破局の手前にまで達したらしい。しかし文枝さんが私をよく知らないと正直にいつてくれたのは私の幸運だった。従来親戚の間の評判のよくない私、妄想や、誤解や、曲解や、悪意や、敵意から、偏屈、一刻、怠惰、吝嗇、貪慾、等、等、勝手放題な悪名をばらまかれた私である。いい加減なことをいはれてはたまらない。お友達のはうでは心當りを聞かせた。その結果は調べたところ萬事吉報ゆゑ一日も早く話をお進めなさいといふのと、酒の席で自分は膝を崩さずにおながら人をそらさないやうな人だといふ報告だったさうだ。かたはらお父様は「沼のほとり」を読み、特に「孟宗の蔭」のなかの私が妙子を可愛がる場所に打込んで、今度こそ私の心はきまつた。と事は一遍に落著してしまつた。世は様ざまだ。それを讀んで私を非難する人もあるかと思へばそのため大事の娘をくれる人もある。

式は秋ときまつたがそれまでも始終手傳つてもらひたい。それにつけても一度先方の人たちに逢つておくことが望ましいのでその日どりを打合せのうちにも目前の必要に迫られて幾度かきてもらつた。いちばん困るのは兄の身につける物の世話だった。それを頼む時に私は

「兄は私より身なりが悪いと氣にするからなるべくいいのを著せてあげてください」

といひ含めておきながらちぎにそれを忘れてしまつた。間もなくある日のこと、茶の間で食卓の向うに坐つた兄がひどくびかぴかするものを著てるのを見て私は家政婦さんが手當り次第に出したのだと思ひ

「大層いい物を著ましたね」

といつたら兄は指で輪をこしらへ目へあてがつて、これが出してくれたのだといつた。

お友達は眼鏡をかけてゐる。私はさうだつたのかと思つて

「そりやよござんしたねえ。いい人ですよ」

といつたら、我意を得たといふ様子をして見せた。さうしてゐるうちにわかつたのはそこにまゐるで八犬傳式因縁が絡みあつてることだつた。文枝さんの母親——私の實の姉はいふまでもない。亡くなつた姉とは繪のはうで狩谷先生の同門で知りあつてゐる。私のごく近い親戚の者とお友達達の妹とは別の繪の先生の同門で、その小さいじぶん附添つていたりした關係からお友達も顔見知りである。お友達が親のやうに慕つてゐる書道の先生は半世紀足らずも昔の實の姉たちの女學校での先生であり、妙子の家とはひと夏葉山で偶ま近處に家を借り、學校が同じところから近づくになつて一緒に遊んださうだ。そのうへ本人は知るまいが妙子の兄弟がその後大學でお友達の叔父さんの學生になり私宅へも入魂じっこんに出入りしてゐる。そのほか同藩や同窓の關係などを辿つてゆくと亡くなつた姉の生家や親戚、私の友人にも縁が絡んでゐる。まことに「偶然」は面白くもまた怖いやうに目にみえぬ蜘蛛の網を張つてゐるものである。

約束の日に私は出かけたが途中妙子が亡くなつたといふ急報を得て引返した。妙子には不意に打明けて驚かしてやらうと思つてたものを。この日のことは「蜜蜂」に書いた。改めて打合せた

日にはお友達が驛へ迎ひにきた。年はとつても女だけに蝙蝠傘で顔をかくして歩くのをなにかと言葉をかけながら並んでゆく。疲れきつた體に日盛りの炎天七八町はらくでなかつた。さて行きついた家はちんまりと門もなしに生垣をめぐらして、話にきいたとほり役をやめて娘二人と書、畫、茶、生け花とめいめいくろうと乃至素人ばなれのした技と樂しみをもち、つましやかに安樂に團欒しつつ餘生を送つて老士官の住居にふさはしいものだった。玄關からあがるとすぐ二階の茶がかつた四疊半へとほされ、流れる額の汗をふいて待つま程なく袴をつけた老士官があがつてきた。さすがにかつぶくがよくて挨拶にもどこか武張つたところがあるとはいふものこのれが昔二龍山の戦ひに僅に生き残つた二人のうちの一人で、二龍山のぬしと綽名あだなされて感狀や金鷄勳章を授與され、その後も永く大陸で任務についてた人とは格闘でもしてみなければわからない。工兵科だつたせるもあるのか器用で繪が好きで自分もなかなかよくかき、病後まだすっかり回復してないといふのにつやのいい赤ら顔の見かけに似ず生下戸で、笑ふとおかめさんみたいな可愛らしい顔になる。酒の話が出て、私が 酒は好きだし相當飲めるけれど一合でも五勺でもそれだけの満足ができる といった時に

「そりやえらい。そりやなかなか出来ないことだ」

といったので

「しかしさうなるまでにはやはりよほど年期を入れませんか」

結 婚

といつたらおかめさんが細い目をなくしてさもかしさうに笑つた。部屋の狭いためか家の人が一人づつあがつてきてひきははされてはおりていつた。羽織袴をつけてるものの聊いささか野武士めいたところもある私はどこか荒大名の茶の湯のかたちだったが、歸つた後の評判を結婚後きくところによれば私は見かけが北歐型で、日本に永くいらつしやるから和服がよくお似合ひになりますといふところだといふことに衆議一決したさうだ。そのうへ皆は私に「顔回」といふ綽名をつけた。書いたものからだらう。顔回は恐れ入るが肱枕でごろ寝をするところだけは似てゐる。家庭をもつてからの心得としては執筆中には茶をもつていつてもそうつとおいてくるやう、食事の用意ができて仕事の中で呼びたてたりしないやう、あまりつましくして恥をかかせないやう、食べ物がむづかしいだらうから心をくばるやう、女の嫉妬はとりわけ見苦しいものだからくれぐれも氣をつけるやう、等、等、親らしい愛情と細かい心づかひの籠つた聞くだけでも有り難いものだったさうだが、實は私の行きかたはそれとは凡そ反對で、執筆のあひだに茶などは飲まないが出されたとて邪魔にはせず、食事の時間はきちんとしていつでも筆をおく、貧乏ぐらしは私のはうが馴れてるらしいし、食事は簡單で料理に手をかけると小言が出る、映畫館でも満員電車でも安全地帯の人ごみの中でも歌をよみ詩を作るといふやうに世間の文士型とはよほどちがつたものなのだ。お父様はかねがね大の御ひいきの私の姪めいたちがこの話に骨を折つてくれることをひどく喜んでたといふ。北歐型顔回は口述試験に及第した。

私はふとしたことから食あたりをしたのが豫かねての衰弱のためかいつまでもなほならず、警察の許可を得て白米の粥をたべたりしても効果がなく、たうとう床についたまま式日になった。その朝しかたなく起き、床屋へゆく支度をしていざ出ようといふ時に茶の間でぼつたりやはりそこへ起きてきた兄と出合った。

「床屋へいくから留守番を頼みます」

私は氣輕にさういつて家を出、時刻も迫つてるので行きあたりぼつたりの汚い家で調髪をすませて歸つたら兄が亡くなつてゐた。私の氣もちは混亂した。私は駆けつけた今日の仲人役の間氏に式の延期を希望したが、結局同氏の意見に従ひ喪を祕してすませてしまふことに決心がついたのが定刻二十五分前。大急ぎで禮服に著かへるあひだに俊子さんが表でタクシーを呼んでくれる。ぼろながら間にあつて學士會館へ五分前。留守のことは來賓總代のはずだつた梶井さんにお願ひしてきたから心配ない。事情は間氏から先方のお父様にだけ話してさりげなく式を進める。人数は時節がら、また私の流儀に従つて凡て二十人ばかり、内輪の中の内輪だけだ。披露の宴で私はあらゆる種類の酒を次つぎと飲んでよほど元氣づいた。主賓である先方の伯父さんが卓子テンプルの向うから

「山本大將はお父さんが五十六の時のお子なので五十六とつけられたといふことですがあなたはなんとおつけになります」

といつたので

「は 五十八とつけます」

と答へたら皆が一度に笑つた。それまでの堅苦しさがそこでほぐれたやうな氣がした。宴後休憩室でも私は平靜に人たちと談笑した。お父様はあとで 見てゐてたまらなかつた といつたさうだ。

文枝さんに自動車で送られて家へついた時にはじめて事情を知つた和子は茶の間の隅で初子さんに慰められながら泣いた。間もなく梶井さんや留守をお願いした人たちが歸り、家政婦さんと女中さんが部屋へ寐にいつたあとそちらとは家の反對の端にかけ離れた奥で和子は次の間に、私は座敷に屍體と床を並べて寐た。平靜ながら不思議な嚴肅な氣もちだつた。遺骨にし、葬式をすませ、位牌だけになつてからも座敷に飾り壇のあるあひだ四十九日私たちはこれを續けた。

兄——それも今は一片の記憶にすぎないが——の急死のために私の結婚は目的の大半を失つた。出来るだけよく世話をしようといふ念願だつたものを。兄はまことに氣の毒な人だつた。人びとの歡心と喝采をかつゑるやうに望みながらそれを買ふ術には甚だ拙劣であつた。私との間についていへば、自分だけが歡心喝采の中心であらねばならず、少くとも第三者のある限り兄の前で私は有つて無きがごとく、否寧ろそれ以下であらねばならなかつた。かくして自ら求めてつくつた敵がこの私ではなくて「不可能」といふ恐ろしい相手であることを覺らず、永い一生をとほして

そのために自ら苦しみ、また周囲を陰惨な暗黒にした。實に五十年私の數しれぬ讓歩も、堪忍も、寛容も、慈悲も、終にこの人を覺醒させることができなかった。四十年ただ亡くなった姉の眞心こめた不斷の諫言と最後にきた老齡によつて晩年多少の反省と自制を見せるやうになつたに過ぎない。私どもの不幸な關係はここに終つた。さうして私の新な、間違ひなく短い生活はこの人の通夜をもつて始まつたのである。

昭和二十一年

亮ちゃんの思ひ出

亮ちゃんについての私の記憶はおよそ三十年前から始まる。「亮ちゃん」もをかしいが、私はさう呼ぶことが氣もちのうへでいちばん自然であり、またさう呼んでもさしてをかしくない年頃に殆ど交渉が絶えて氣もちだけがもとのままに續いてたのである。しかし今度こそはいよいよ完全に交渉が絶えてしまつた。で、亮ちゃんはもう呼びかたをかへる機會もないはば永遠の亮ちゃんになつた。

三十年ほど前のことである。ひと夏私は脚氣の轉地療養のため暫く鶴沼くげぬまの家の厄介になつた。たしか亮ちゃんが二つぐらゐの時だらう。廣い松林の中で、ひとつ屋敷うちとしてはかなり離れてる閑靜な二棟の一つ、書齋になつてはうを借り、食事と茶だけを住居のはうで一緒にすることにしてゐた。ところが私が子供好きのところへ亮ちゃんはちやうど相手のほしいじぶんで遊びに遊び友達になつたはいいが、あいにく涎よだれを出す最中でこちらは涎だらけになつたばかりか、格闘の眞似事で押し倒されたり逃げ廻つたりするうち一張羅のセルの著物の膝をぬいてしまつた、尤

も古いも古かつたのだけれど。

また時には恭子さんとあまり遠くない川のはうへ散歩したり、旅館のあるはうへ駄菓子を買ひにいったりした。恭子さんも私も駄菓子が好きなのだ。そんな時おぶつて歩くと揺籃と同じ効果があるのかぎに眠つた。眠つた子は童話にある負はれた河童みたいに重くなるので汗しづくになつて歩いたりしたものだつた。それにそのじぶんから頭に數が一杯詰まつてもゐたものかごろりごろりするのがえらく目方にかかつた。

かた言で私をカンシをぢちやんといつてたが、だんだんカンシをぢちやんがはなせなくなり、ひととき相手をして別棟へ歸らうとすると泣きわめいて恭子さんを手こずらしたりした。一時は私でないと寝つかないまでになつた。眠けざしてむづかる子をおぶつて寝つかせるぐらゐはなんでもないけれど寝ついたのを恭子さんが抱きとらうとすると目をさましてワーと泣く。私が體を低くして背中から徐かに蒲團の上におろせばいいのだが子供をもつたことのない私にはそれがうまくゆかず高いところからどさんと落しては泣かせてしまふのだつた。

その後亮ちやんは小石川の私の家の隣へ引越してきた。そこで妹の道ちやんが生れた。赤ん坊にはあまり可愛くない時期が相當續くものだのに不思議な子で初めから可愛かつた。私は時どき行つて赤い蒲團の上でまじまじして顔を見ながら やい こいつ なぞといふのを、亮ちやんはそれがどうしても腑に落ちないらしく

「をぢ様道ちやんが可愛いのにどうしてコイツなんて仰しやるの」

といった。随分敏感でゐながらもこのひ方はボンボン時計のねぢがゆるんだみたいでなにか面白かつた。小學校の入學前後ぐらゐだつたらうか。

「街路樹」の中の「しづかな流」からのぬきがき。

道ちやんが二つぐらゐの時だつたらうか、私たちは小石川で隣りあひに住んでゐた。私はまだ乳臭い道ちやんを目にも入れたいほどかはいがつつたが、そのかはいがりがたがまた私一流だつた。それは地つづきの裏口から庭のはうへまはつてゆくといきなりむりむりした道ちやんを抱きあげ手水鉢てずぼの柄杓ひしを持たせて私の頭から水をかけさせるのだ。單物ひともの一枚の暑中なればこそだが、さうして「ちべたい ちべたい」といひながら、誰もほかにはさせてくれないそんないたづらをさせられて上氣嫌でゐる道ちやんの顔を見あげながら、その冷たさが可愛さとなつて身にしみるのを感じながらびしょ濡れになつて喜んでゐる。それを自分も小さい時には内實そんないたづらが嫌ひでもなかつたであらうお母さんが冗談に——半分は本氣だつたかもしれない。「あんないたづらを教へて悪いをぢちやまねえ」といったのを兄貴の亮ちやんがまにうけて、大事の妹のため正義の戦を起すつもりかなにかで私の腕をむきにひつ搔いて血を出したといふ事件である。ぬき書きをはり。

恭子さんと家へ遊びにきた時だつた。私ののだぼとけを見てなんだときくから アダムの林檎

だ といつたら本當の林檎がつかへてるのだと思つて「あー少しさがつてきた またあがつてきた」と本氣に心配を始め、恭子さんに 本當の林檎ぢやない と教へられて狐につままれたみたいな顔をした。すべてがまつ正直だった。

亮ちゃんのここでは卵をとるために鶏を飼つてゐた。その雛を私のところの犬がくはへて殺してしまつた。私は死骸と歟をもつて詫びにいつた。恭子さんも亮ちゃんも今が今まで元氣よく遊んでた雛が無慘な死骸となつたのを見てとてもたまらなさうな顔をした。私はそのあけつばなしの感情の表示を見てちよいと意地わるな氣を起し、庭へ穴を掘つて死骸を投げ込み、土をかけ、その上につて踏み均した、墓掘りみたいに平氣な顔で。そばにゐた亮ちゃんは意外な面もちで

「をぢ様ぼんと抛り込んでおしまひになつた」

といつて説明を求めるやうに座敷にゐた？恭子さんのほうを見た。恭子さんは

「をぢ様わざとあんなことなさるのよ」

と圖星をさした。

その次は落合の文化村の家である。いちばん多く行き、一緒に茶をのんだり食事をしたりしたこと度もたびあるにもかかはらず亮ちゃんに關してこれといつた記憶がない。ちやうど大人とお互に仲間になれない年ごろになつてたのだらう。一度平塚の私の家へ泊りにきたことがあつた。私の住居も轉轉とかはつてたのだ。十と幾つぐらゐだつたか、記憶に間違ひがないとすれば寢ば

けたみたいな色合の著物をきて——それが亮ちゃんの感じにしつくり合つてゐた。——ぼーつとして、それでゐてぼんやりなのでも、不愛想なのでも、不氣嫌なのでもなく、とてもいい感じを與へた。ひとりで海岸を散歩したりしてむづむづと幾日か滞在していつた。

その次は鎌倉の家。

「街路樹」の中の「しづかな流」からのぬきがき。

……俤でいつたらぢきにわかつた。昔は東京の山の手にもよくあつた生垣、それも重に杉垣つづきの士族町？だが、明かに俤のない時代の設計で、やつと通れるぐらゐだ。亮ちゃんが出てきた。おや と思ふ。恭子さんは東京へ、もし私がきたら電話をかけてといひおいていつた といふ。あがつてなにより先に手土産の松茸と甲州葡萄を出す、たしか亮ちゃんの好物なので。二年ばかり逢はないうちに亮ちゃんは私と背がおなじくらゐにのびてよつぽど大人になつてゐた。十八ださうだ。私のいろんな質問に對して返事らしい返事をし、私の話に對して話らしい話をする、いつものぼつりぼつり式ではあるが。高等學校の一年か二年だらう。獨乙語の勉強をしてるところだつた……寫眞機があつたので縁側の日向へ坐つてとつてもらふ。そのままそこへ向きあつて話す。

「將來なにをやるつもり？ 數學？」

「數學を専門にするのはもの足りないけれど數學を使ふものをやりたいと思ふからどうせ理科

だ」

そこで近頃はやるらしい宇宙線のことや、今年は黄道光が非常にすくないなどいふ話を持ちだす。しかしあんまり話すと自分でわからなくなる。相手次第で佛を出したり鬼を出したりするもののこの傀儡師くわいしは一個の傀儡にすぎないのだから。かきぬきの一をはり。

恭子さんから葉書がきて、いつぞや私が 行つてよければ毎日でもいく といったので待つてゐてもいつかう来てくださらないが……とあつた。で、早朝から行く。九時をすこし過ぎた頃ついた。茶の間へ通されて待つ。食卓に食器が並んでゐる。食事まで。恭子さんも朝のお化粧がまだすまないらしい。そのうち亮ちやんが一番先に出てきた。道ちやんの聲がする。足の腫物を切開したため學校を休んでるのださうだ。可哀想だが私にとつてはもつつけの幸だ。皆が食卓についてるうちから「制服の處女」の話をはじめ。私が、八回みた といへば、道ちやんは例の判決を下すやうな調子で をーかーしい といつて笑ふ。恭子さんをはじめみんなこのまへ逢つた時よりふとつて元氣らしいのが嬉しい。食後座敷へうつる。亮ちやんがききたいといふので制服の處女の話をする。八回も見てるので委しい。端役の表情までやつてみせたりして實物どほりざつと一時間半かかつて話しをはる。

「面白いか」

といへば

「面白い」

といふ。さうしてとどのつまりが をかしなをぢ様だ といふことに衆議一決する。をかしいどころかこちらは眞劍なのだ。いろいろ話しつづけてひるもすぎ、ふと氣がついた時には日影がうすくなつてゐた、寫眞をとつてもらふ約束を朝しておいたのだつたが。

「くたびれたから誰か話さないか」

といへば

「きくはうが面白い」

といふので晩までひとりで喋りつづける。映畫の話を三つ四つしたあげく

「もつとききたいか」

と亮ちやんにきいたら

「もう澤山だ」

といった。八時すこし前に歸る。愉快。

ぬきがきの二をはり

その次はずつととんで姉の告別式の日である。山門から祭壇まで相當の距離があつた。そこを背の高い知らない人が歩いてくるのを身内の列の中からよく見たら亮ちやんだつた。先生になつたのでちやんと禮装してゐた。あたりまへの事だが打絶えてたので思ひがけないやうでもあり、

珍しくもあつた。受附の机の前で亮ちやんらしく不器用にむじむじと名刺を出してるのを私はじつと見つづけた。その後久しぶりでひとり赤坂の家へ来てくれた時に偶たままその日の話が出たら

「僕あの時てれちやつた」といつた。私の記憶に残つた最後の言葉だ。

亮ちやんはいい子だつた。家庭の教育も教育だし、その教育が亮ちやんの性格によく合つてたといふためもあらうが、元來素質がとびきりよかつた。さうして時をおいて逢ふたんびによりよくなり、感心な子になり、うま味ができ、最後に頼もしげな立派な青年になつた。これは世間人としての亮ちやんをいふのではない。學者としても有望有爲だつたらうと思ふがそれは知らない。私は道徳的、人格的の意味において恐らく決して間違ひなく感じたところをいふのである。

昭和二十一年六月六日

あとがき

私が童話、特に成人のための童話——適當な名が見つからない。——を作ることと思ひついたのは平塚海岸に住んでた時だつた。それが一群の鳥の物語になつたのは最初の一つが鳥——鶴の話だつたからだらう。しかしそれを單純に味よく纏めるのに暇どつてるうちに題材になる話のある雁のものが先に出來た。で、大汗の前での席次としては鶴が首席であるべきのをこの本では稿了順發表順によつて「後の雁が先」になつてゐる。はじめ二十羽ほど選ばれた鳥のうち三十年後の今日やつと十羽が語りをはつたところである。

「雁の話」は私共の時代には読みもききもしたものだが今の人にはお馴染がないかもしれない。「鳩の話」は玄奘が印度の鳩寺へ詣つた大唐西域記の記事に因んでなにか楽しい童話が生れさうだつたのが聖書へ一轉して見るごとき悲劇になつた。

「ひばりの話」は子供の雑誌にのせるために成人向きの計畫を急に子供向きにかへた出發點の不滿が妙に痼疾となつてたがもうよからう。もとの計畫も忘れてしまつた。

「鶯の話」は他のものところが鶯の生態に對する興味を中心である。

「白鳥の話」のそもそものは古事記にある簡単な二つの話から思いついたのだけれども本命は純一無雑の、とりわけ愚直ひたむきの忠誠である。

「いかるの話」はざつといへば大和の野に集つた鳥たちにああいふことを見せ、きかせ、いはせ、またああいふ歌をうたはせたかつたのだ。

「鷹の話」はルスタムとフリーラーグの物語を使はうかと思つてたところたまたま妹たちと童話の話をしているうちに興へられた暗示によつて即座にヨゼフのそれとかはつた。かはつてよかつた。「鶉の話」は十五、六のじぶんはじめて「海人」の話をきき何かにしたいと思ひながら未熟でものにならず、五十數年忘れもせず作りもせずだつたのがひよいと今の形になつた。すくなくとも永年の負目を返した喜びがある。

「鶯の話」には因縁がある。あるとき地方の讀者がお母さんをつれてきた。お母さんは女子大出で 鳥の物語 を知つてゐられた。そして自分は鶯を飼つて風呂敷にくるんで抱いて歩いたことがあるが 鶯の話は出来ませんか といふことだつた。當時私は多少の腹案はありながら著手はしてゐなかつたのをよほどたつてから完成して送つた時にはお母さんは重い中氣になつてゐられた。話は友人が読んであげたのだらう、おぼつかないお母さん自筆のお禮狀がきた。その後お母さんは亡くなつた。

「鳥の物語」の成功不成功はおいて、それが題材的に私好み、私の持味だといふ點から私はこ

の巻の出たことに特別の満足をおぼえる。

昭和三十六年二月

著者

納本

中 勘 助全集
第 三 卷



昭和三十六年二月二十八日 初版發行

定價 九五〇圓

著 者

中 勘 助

發 行 者

角 川 源 義

印 刷 者

中 内 あ き 子

製 本 者

鈴 木 俊 一

發 行 所

株式會社 角川書店

東京都千代田區富士見町二ノ七
振替口座東京一九五三〇八番
電話九段 〇一一一 (代表)

原本

中 勘 助 全 集 全 8 卷

-
- | | | | |
|-------|-------------------|-----------|-------|
| 等 1 卷 | 銀の匙・花さか爺 他 | 〈既 刊〉 | ¥ 950 |
| 第 2 卷 | 提婆達多・菩提樹の蔭 他 | 〈既 刊〉 | ¥ 950 |
| 第 3 卷 | 鳥の物語 (雁の話・鳩の話…) 他 | 〈既 刊〉 | ¥ 950 |
| 第 4 卷 | 沼のほとり・蜜蜂 他 | 〈次回配本〉 | |
| 第 5 卷 | しづかな流 (一) 他 | 〈第 5 回配本〉 | |
| 第 6 卷 | しづかな流 (二)・街路樹 他 | 〈第 6 回配本〉 | |
| 第 7 卷 | 逍遙・逍遙から疎開まで | 〈第 7 回配本〉 | |
| 第 8 卷 | 樟 ケ 谷 他 | 〈第 8 回配本〉 | |
-



